

平成22年度 女性に対する暴力防止フォーラム

と き：平成22年11月12日(金) 13:30~15:30

と ころ：学園前ホール（奈良市西部会館市民ホール）

講演

「傷つけ合う家族～DV・虐待を乗り越えて～」

講師：藤木 美奈子さん（NPO 法人 WANA 関西代表・博士(創造都市)）

○藤木とは

私は、1995年に自分の本名と顔写真を入れて家族からの暴力を告発しました。43歳で研究の道に入り、博士号を取得しました。今、その研究を生かして、DV被害者のための支援プログラム（SST）を実践しており、関西大学大学院でも被害者支援を担当しています。今年9月には、悲願であった、全国の母子生活支援施設の職員への対人援助者向けSST研修を実施しました。

○暴力とはー最大の人権侵害

暴力とは、相手に対して優位に立つものを利用して相手を服従させ、自己の考え方・価値観や利益を相手に強制する行為です。個人を尊重しない、本質的に理不尽なもの、「安心」「自信」「自由」という人間らしく生きる権利を奪うものです。暴力の種別で最大のものは戦争だと思います。DV、セクハラ、アカハラ、パワハラなどもそうです。また、暴力には、身体への暴力、言葉を使った心への暴力、性的な暴力、社会的暴力などがあります。暴力をふるわれる対象になりやすいのは、子ども、高齢者、女性、障がい者、ほかの弱者です。私たちの周りには暴力がたくさんあるのです。

○傷つけ合う家族たちの諸相

DV相談件数はこの5年間で25,000件も増加しています。女性の約3人に1人が被害を経験し、男性も17.4%の被害者がいるという統計もあります。平成20年度の子ども虐待相談件数は平成2年の約30倍にもなっています。子どもと逃げて来る母親の中には、子どもにも暴力が及んでいる場合が多く、母親自身が子どもを虐待していることもあります。ですから、DV防止は児童虐待防止だとはっきり言えると思います。

○私の来た道

私は、何重にも崩壊家庭が抱え持つリスクを経験してきました。今でも心から母にうち解けることができません。私が小学生の時に私を置いて死のうとしたからです。DVで逃げてきた女性の中には親が自殺している人、虐待された経験がある人が結構多いです。親が自殺することも児童虐待だと思います。私は、親から虐待があり、早い結婚をし、DVを受け、失踪し、1から人生をやり直しました。そして夫の死によりやっと解放されました。子ども時代に愛情を持って育ててもらえなかった子は一生苦労すると言えます。DVはそのひとつで、あらゆる困難にあうということです。

暴力の後遺症が大変でした。暴力で傷つけられた心を立て直すことが一番難関でした。私は、家庭の中で暴力という危険に26年間さらされていました。そこから逃れることができた時、やっと幸せになれると思いましたが、職場でまともな人間関係を築けずトラブルばかり起こしてしまい、死にたいと思いました。全てのことを否定して考えるようになっていました。私は、大阪府の職業訓練校に入り、あらゆる本を読み、女の人も自分の生き方を決めても良いということを知って驚きました。対等な男女関係について考えたことがなく、結婚したら女の人は殴られるものだと思っていました。そうした価値観を根底から翻してくれたのが千葉敦子さんの本でした。私は彼女をロールモデルにして、こういう時彼女ならどうするのかと考えながら、彼女の後を追うように生きてきたと思います。私は、認知行動療法によって自尊感情を取り戻しつつ、社会的スキルを取り戻すということをやってきました。何事も否定的にとらえ、すぐ自分を責めないように、こういう時はこうするという性格改造プログラムを自分で作って、それに沿って生活するというのを3年間位繰り返しました。その結果、無事に社会適応ができるようになったのです。

○DV・虐待被害者の行く道～社会性の回復をめざして

大阪府内で生活保護を受給する母子家庭のうち、母親が強いストレスが原因とみられる精神疾患

を患っている世帯は約3割。ほとんどがDV、児童虐待などの貧困要因を複数抱えていることも判明しています。生活保護が親から子へ引き継がれる世代間連鎖は約3割に上っています。母子世帯の平均年間就労収入は171万円、父子世帯は421万円と、差は歴然としており、6割近くの母子世帯が父親から養育費を受けとったことがないということです。

私は、大阪市内の2つの母子生活支援施設でSSTを実践しています。SSTは、まず人間関係とは何なのか見直してもらいます。2番目に、他者の思考と感情の理解の仕方を学びます。3番目に、自分の思考と感情の伝え方を学びます。4番目には、人間関係の問題を解決する方法を学びます。その目的は、自分は素晴らしい存在で、生きているだけでいいのだと理解し、そもそも自分の中にある力に気づいてもらうことです。暴力や虐待の後遺症からの回復も目的です。自分が悪かったからではないと理解してもらうために生育過程から始めていきます。それが世代間連鎖を断ち切る為にも一番重要だと思います。虐待やDVは非常に痛ましいことですが、自分がDVにあったのは事故的なものではなく、自分の中に何か乗り越えていく機会を必要としていたのだと考え、成長の糧にしてほしいと思っています。

○すべての暴力にNOを

家族も人権を持ったかけがえない存在だと認識することが大切です。相手に甘えきってしまったくないことです。むしろ、夫婦であれば他人だと思った方が相手に対する過剰な期待が存在しないと思います。相手を自分の望むような人間にしたい、という気持ちそのものがパワーとコントロールの関係です。相手をコントロールしようとすると苦しみが始まるのです。

「生き難さ」を克服し、子ども世代に暴力を引き継がないことも大事です。生き難いと感じている人は人生のどこかで心に傷を負っていることが多いです。自分が抱えてきた違和感を専門家や信頼できる友人に話したらいいと思います。その結果、心理療法やプログラムへの参加が必要かもしれません。一度そういうことを受けて、自分の心の傷に向かい合い回復するというプロセスを持った方がいいと思います。自分の中の生き難さが子どもに向けられているようなことが多すぎるのです。人が他人を癒す力は大きいです。人に傷つけられた傷は、人でないと治せないのです。

暴力への無視・無関心も加害行動です。時々メールをくれる人、会おうと言ってくれる人がいる、その人が専門家でなくても、誰かが自分のことを気に掛けているということが大事なのです。いろいろな問題を抱えている人でも誰かつながっている人がいれば大きな事故を起こさないとはいいます。誰かひとりでもつながっていることが大切なので、皆さんがそのひとりになって欲しいと思います。私たちがすぐにでもできることだと思っています。

私は、こんなに幸せになれるとは思っていませんでした。今、家族や友達、仲間、仕事など、失ったものすべてを手にはしています。自分の人生の前半に起こったことがずっと疑問で、その答えを追い続けていって気が付いたら今になったというのが実感です。どうして私はあんな目にあっただのか、人生って何だろうって考え続けて、考えるだけでなく、その道すがら倒れている人がいたら抱き起こし、歩けなくなっている人がいたら手を握って一緒に歩いてきたような感じです。

私がこんなふうにDVを告発、カミングアウトをして生きてきたのも、娘が私みたいに性暴力にあたり、夫から殴られたりするのには絶対に嫌だ、そんな目にあわせたくない、だから私は過去にあったことを本に書いて世の中に知らせなければいけないと思ったのがきっかけでした。その目的はだいぶ果たされてきたのかと思っています。

最後に、私が一番好きな言葉に、「どんな人生もいいものだ」という言葉があります。私は、良い人生も、悪い人生もないと思っています。正しい人生、間違った人生もないと思っています。それぞれの人生の価値は学びの多さで決まるとしています。困難に満ちた人生を送っておられる方ほど学びに富んでいる、生まれてきた大きな意義がある、と考えています。どなたの人生も素晴らしい、今、目の前に座っておられる皆さまひとりひとりの人生も愛おしいと思っています。